

沖縄北部・金武方言の動詞形態論

玉元, 孝治

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

44

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

67

(発行年 / Year)

2020-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00024287>

沖縄北部・金武方言の動詞形態論¹

玉 元 孝 治

1. はじめに

1.1 地理・系統

金武方言は、沖縄島のほぼ中央に位置する金武町の金武集落および並里集落で話されている方言である。行政区画としての金武区と並里区の人口は7,503人（2019年3月末現在）で、年齢別人口などから、金武方言の話者数は1,000人を上回らない程度と推計される。

沖縄島及び周辺離島の言語は、大きく「北部方言」と「中南部方言」に二分される。その境界は、東海岸では金武町とうるま市（旧石川市）の間、西海岸では恩納村恩納と同村谷茶の間にあるといわれている（琉大方言クラブ1970）。金武方言は北部方言に属するといわれるが、典型的な北部方言の特徴とされる「ハ行p音」「カ行h音」「有気音と無気喉頭化音の対立」などの音声的特徴を欠いている。金武方言の位置づけを論じた仲間（2000）は、金武方言は音声が「中南部諸方言的」で、アクセントが「北部諸方言的」であると分析している²。

ローレンス（2006）は、「北部方言群」と「中南部方言群」がそれぞれ異なる語形の改新を共有することから、両方言群が系統的に互いに独立したまとまりを構成することを論証している。金武方言は他の北部諸方言と同じ改新を共有していることから、「北部方言群」の系統に属するものと結論することができる。

1.2 本稿の方法論的立場

沖縄語の動詞形態論を扱った先行研究は、1つの動詞語根に対し「基本語幹」「連用語幹」「音便語幹」など複数の語幹を設定して表層の音声形式を記述する方法（服部1955など）と、単一の語幹から音韻規則の適用によって表層の音声形式を導出する生成音韻論的なアプローチ（有元1993、宮良2000など）に分かれる。本稿では、動詞の表層形式を単に記述するだけでなく、基底形式からの派生過程を説明することを射程に入れ、後者の立場を採用することとする。

また、分散形態論（Halle and Marantz 1993）の考え方を一部取り入れ、一般的な音韻

¹ 本稿を執筆するにあたり、初期の草稿を西岡敏先生にお読みいただきご助言をいただいた。また、匿名の査読者からは、「係り結び」などの用語法などについて重要なご指摘をいただいた。記して深謝の意を申し上げる。

² 金武方言は、型の区別が明確な3型アクセントの体系を有している（cf. 松森2009）。なお、通説では、沖縄語（首里方言など）は2型アクセントとされる（cf. 上村1963など）。

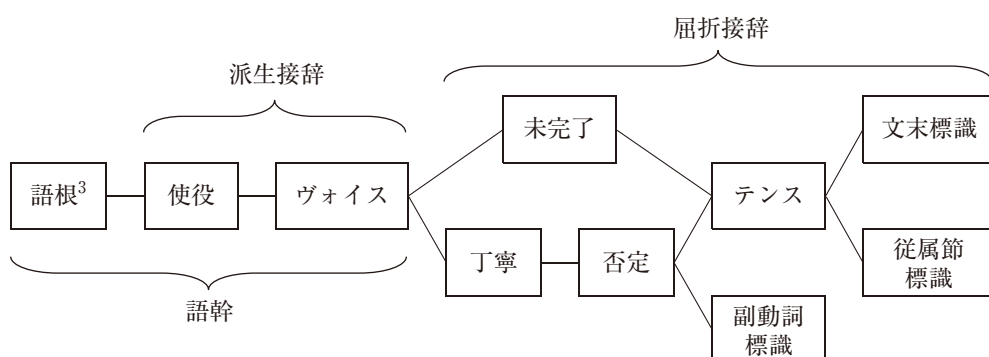
規則によっては捉えがたい異形態の問題を扱うとともに、使役交替する動詞の「語根」の内部構造についても論じる。

2. 語幹と接辞の分類

金武方言の動詞は、「語幹」に「屈折接辞」が付加することによって語として完成する。語幹は、動詞の語彙的な意味を表す「語根」と、語根の意味を拡張する「派生接辞」からなる。派生接辞は随意的な要素であるから、語根はそれだけで語幹となることができる。屈折接辞と派生接辞を区別する基準については、2.2.1節で述べる。

各接辞の承接順を以下に示す。

(1) 各接辞の承接順



2.1 語幹の分類

動詞の語幹には、音韻形態規則によって予測可能な表層形式をもつ「規則変化語幹」と、規則からは予測されない表層形式をもつ「不規則変化語幹」がある。

2.1.1 規則変化語幹

規則変化語幹は、語幹末に現れる音素によって、前舌母音語幹・*r*語幹・非前舌母音語幹・*b*語幹・*m*語幹・*n*語幹・*s*語幹・*t*語幹・*k*語幹・*g*語幹の10種類に分類することができる。「*d*語幹」として分類すべき語幹（沖縄語首里方言の *nnd*-「見る」、*nind*-「眠る」など）は金武方言にはない。

各語幹は、非過去接辞（→3.3.1節）が後接するとき、どの異形態が選択されるかによって、3つのグループ（Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類）にまとめることができる。Ⅰ類には、前舌母音語幹と *r*語幹が含まれる。Ⅱ類には、唇音または鼻音を語幹末にもつ語幹（非前舌母音語幹・

³ 4.3節において、使役交替する動詞の「語根」は、 $\sqrt{\text{Root}}$ と動詞化辞*v*に分けられることを論じる。

b語幹・m語幹・n語幹)が含まれる。Ⅲ類には、唇音・鼻音以外の阻害音を語幹末にもつ語幹(s語幹・t語幹・k語幹・g語幹)が含まれる。

前舌母音語幹は日本語の母音語幹動詞に対応し、非前舌母音語幹はおおむね日本語のワ行動詞(ハ行動詞)に対応する。非前舌母音語幹は、祖形には存在した語幹末子音wが完全に脱落しており、どの活用形においても語幹末に子音が現れない。

語幹末の音素だけではなく、その直前の音素が、後接する接辞に影響を及ぼす場合がある。たとえばr語幹は、語幹末の/r/の前の母音が/i/の場合、後接する接辞の初頭音のtを破擦音化させる。したがって、r語幹の下位クラスとして、/r/の前の母音が/i/の群を「i₋」、/r/の前の母音が/i/以外の群を「V_{*i}」として区別することとする。また、b語幹は、語幹末の/b/の前に母音があるときは後接する接辞の初頭音のtを有声化するが、語幹末の/b/の前に/n/があるときは、tの有声化が適用されない。前者を「V₋」、後者を「n₋」として区別する。

前舌母音語幹とr語幹は、語幹のモーラ数によって異なる音韻規則が適用される場合がある。1モーラ語幹を「μ=1」、2モーラ以上の語幹を「μ≥2」と記して区別しておく。

(2) 規則変化動詞の語幹分類

語幹の種類			語幹	非過去	過去	
Ⅰ類	前舌母音語幹		μ= 1	<i>ci</i> -「着る」	<i>ci-Ø-n</i>	<i>ci-tea-n</i>
			μ≥ 2	<i>uki</i> -「起きる」	<i>uki-Ø-n</i>	<i>uki-ta-n</i>
	r語幹	V _{*i} _	μ= 1	<i>tur</i> -「取る」	<i>tu-Ø-n</i>	<i>tu-ta-n</i>
			μ≥ 2	<i>cikor</i> -「作る」	<i>ciko-Ø-n</i>	<i>ciko-ta-n</i>
		i ₋	μ= 1	<i>çir</i> -「切る」	<i>çi-Ø-n</i>	<i>cit-tea-n</i>
			μ≥ 2	<i>ucikir</i> -「切る」	<i>ucikir-Ø-n</i>	<i>uciki-tea-n</i>
Ⅱ類	非前舌母音語幹		<i>wara</i> -「笑う」	/wara-i-n/ → <i>ware-n</i>	<i>wara-ta-n</i>	
	b語幹	V ₋	<i>asub</i> -「遊ぶ」	<i>asub-i-n</i>	<i>asu-da-n</i>	
		n ₋	<i>ninb</i> -「眠る」	<i>ninb-i-n</i>	<i>nin-ta-n</i>	
	m語幹		<i>num</i> -「飲む」	<i>num-i-n</i>	<i>nu-da-n</i>	
	n語幹		<i>cin</i> -「死ぬ」	<i>cin-i-n</i>	<i>çi-dza-n</i>	
Ⅲ類	s語幹		<i>koos</i> -「壊す」	/koos-ju-n/ → <i>koos-u-n</i>	<i>koo-tea-n</i>	
	t語幹		<i>mat</i> -「待つ」	/mat-ju-n/ → <i>matç-u-n</i>	<i>ma-tea-n</i>	
	k語幹		<i>kak</i> -「書く」	/kak-ju-n/ → <i>katç-u-n</i>	<i>ka-tea-n</i>	
	g語幹		<i>wiig</i> -「泳ぐ」	/wiig-ju-n/ → <i>wiidz-u-n</i>	<i>wii-dza-n</i>	

2.1.1.1 前舌母音語幹とr語幹の区別

前舌母音語幹に初頭音が母音の接辞が後接する場合、語幹と接辞の間に挿入音(epenthesis)として /r/ が挿入される (de Chene 2019)。逆に、r語幹に子音または特殊モーラ音素 /:/ で始まる接辞が後接する場合、語幹末の /r/ が削除される。

(3) 前舌母音語幹に適用される /r/ 挿入規則

$$\emptyset \rightarrow r / V_{[+front]} _ -V$$

(4) r語幹に適用される /r/ 削除規則

$$r \rightarrow \emptyset / _ - \{C, : \}$$

これらの音韻規則のために、前舌母音語幹と r語幹の活用形は、ほとんど同一のパターンに収斂する。

(5) 前舌母音語幹と r語幹の活用形の比較

語幹の種類	語幹	命令 1	否定	非過去	丁寧	過去
前舌母音語幹	<i>uki</i> -「起きる」	<i>uki-r-i</i>	<i>uki-r-an</i>	<i>uki-Ø-n</i>	<i>uki-jabi-n</i>	<i>uki-ta-n</i>
r語幹	<i>cikor</i> -「作る」	<i>cikor-i</i>	<i>cikor-an</i>	<i>ciko-Ø-n</i>	<i>ciko-jabi-n</i>	<i>ciko-ta-n</i>

しかし、r語幹とほとんど同一のパターンで活用するからといって、前舌母音語幹の語幹末にはじめから /r/ があると考えるのは妥当ではない。たとえば、前舌母音語幹の *kangee*-「考える」、*uki*-「起きる」はゼロ派生によって名詞化されるのに対し（例：*kangee*「考え」、*hee+uki*「早起き」）、r語幹の *keer*-「帰る」、*cir*-「知る」の名詞化形は、名詞化辞 *-ji* が義務的に付加する（例：*kee-ji*「帰り」、*munu+cir-i*「物知り＝易者」）⁴。*kangee*、*uki* の語幹末に /r/ があるとする、名詞化形はそれぞれ、**kangee-ji*、**ukir-i* となるはずであるが、いずれも正しい語形ではない。

また、*ci*-「着る」と *cir*-「切る」の活用形の違いを説明する上でも、前舌母音語幹と r語幹の区別が必要となる。いずれも後接する接辞の初頭音の /t/ を破擦音化させるが、*cir*-「切る」の場合はさらに、語幹末の /r/ が後接する接辞の初頭音の /t/ に同化して、促音便化が起こる（cf. *ci-tca-n*「着た」vs. *cit-tca-n*「切った」）。この促音便化は、前舌母音語幹では起こらず、音節核に /i/ の母音をもつ 1 モーラの r語幹 (*ir*-「入る」・*hir*-「(尻を) 放る」・

⁴ *keer*-「帰る」の名詞化形が *kee-ji* となるのは、/i/ 以外の母音と /ji/ に挟まれた /r/ を削除する音韻規則が適用されるためである。この音韻規則は、/i/ と /ji/ には含まれた /r/ には適用されないため、*cir*-「知る」の名詞化形では /r/ が残存して *munu+cir-i* となる。

cir-「知る」など)では規則的に起こる。

2.1.2 不規則変化語幹

次に挙げる動詞語幹は、不規則に活用する。

(6) 不規則変化語幹

- a. 存在動詞・コピュラ動詞：*ac*-「ある」／*ne*-「ない」 *ur*-「いる」 *e*-「である」
- b. 無音節語幹：*s*-「する」 *k*-「来る」 *m*-「見る」 *j*-「言う」
- c. 尊敬補助動詞：*nsoor*-「なさる」
- d. その他：*iri*-「入れる」 *ik*-「行く」 *kunb*-「結ぶ」 *moor*-「いらっしゃる」

ne-「ない」以外の存在動詞・コピュラ動詞は、過去接辞(→3.3.2節)や丁寧接辞(→3.6節)が後接するとき、語幹の母音が長音化する(例：*aa-ta-n*「あった」、*aa-bi-n*「あります」)。また、*ac*-「ある」と*e*-「である」は、否定接辞が付加するとき、補充形語幹が用いられる(→3.5節)。

無音節語幹は、子音のみからなる語幹である。活用形の例を以下に示す。

(7) 無音節語幹動詞の活用例

語幹	否定	非過去	過去
<i>s</i> -「する」	<i>s-an</i>	/s-ju-n/ → <i>s-u-n</i>	/s-ta-n/ → <i>t-tca-n</i>
<i>k</i> -「来る」	<i>k-un</i>	/k-ju-n/ → <i>s-u-n</i>	/k-ta-n/ → <i>t-tca-n</i>
<i>j</i> -「言う」	<i>j-an</i>	/j-ju-n/ → <i>j-u-n</i>	/j-ta-n/ → <i>i-tca-n</i>
<i>m</i> -「見る」	<i>m-an</i>	<i>m-i-n</i>	/m-ta-n/ → <i>nn-tca-n</i>

k-「来る」の語幹が非過去形で*s*-に変化するのは、後接する接辞の初頭音/j/が語頭の/k/の摩擦音化を誘発するためであり、金武方言の音韻法則から予測可能なものである⁵。無音節語幹を不規則変化とする理由は、過去接辞の-*ta*- (→3.3.2節)など初頭音が/t/の接辞が後接するとき、語幹部分が変化するという予測不可能性のゆえである。また、無音節語幹は、後接する接辞の第1音節を長音化させる場合がある(例：*c-iiwa*「しなさい」、*s-uu-ra*「するのだろうか」、*s-aabi-Ø-n*「します」)。これは、語幹が独立した音節をもたないことによって誘発される、代償長化(compensatory lengthening)に類する現象とみることができる。*s*-「する」と*k*-「来る」の過去形は、直説法〈叙実〉の-*n*以外の文末標識

⁵ 語頭の/k/が直後の/j/によって摩擦音化する例は、*soodee*「兄弟」、*suu*「今日」などの語でもみられる。

または従属節標識が後接するとき、テンス接辞が長音化する（例：*t-tcaa-ra*「した（来た）のだろうか」、*t-tcaa-kutu*「した（来た）ので」）。一方、*j-*「言う」と*m-*「見る」の過去形は、それぞれ語幹が*i-*、*nn-*に変化して音節をもつようになるため⁶、テンス接辞の長音化は起こらない（例：*i-tca-kutu*「言ったので」、*nn-tca-kutu*「見たので」）。

尊敬補助動詞 *nsoor-* は、非過去接辞（→ 3.3.1 節）や未完了接辞（→ 3.4 節）が付加する場合に、語幹が接辞と融合して *nsee-* に変化する。また、初頭音が /t/ の接辞が付加するとき、/t/ が破擦音化する。

(8) 尊敬補助動詞の活用形

語幹	命令 1	否定	非過去	未完了過去	過去
<i>nsoor-</i> 「なさる」	<i>nsoor-i</i>	<i>nsoor-an</i>	<i>nsee-n</i>	<i>nsee-ta-n</i>	<i>nsoo-tca-n</i>

「その他」に挙げた動詞は、初頭音が /t/ の接辞が後接するときに限り、規則的な屈折パターンからは予測されない形式で現れる。

(9) 「その他」の不規則動詞の過去形

語幹	基底表示	予測される形式	実際の表層形式
<i>iri-</i> 「入れる」	/iri-ta-n/	*iri-ta-n	<i>it-ta-n</i>
<i>ik-</i> 「行く」	/ik-ta-n/	*i-tca-n	<i>i-dza-n</i> ⁷
<i>kunb-</i> 「結ぶ」	/kunb-ta-n/	*kun-ta-n	<i>kun-tca-n</i>
<i>moor-</i> 「いらっしゃる」	/moor-ta-n/	*moo-ta-n	<i>moo-tca-n</i>

2.2 接辞の分類

2.2.1 形態論的 분류

接辞は、「屈折接辞」と「派生接辞」に分けられる。

屈折接辞と派生接辞は単一の基準によって明確に区別できるものではなく、先行研究において両者を区別するためのさまざまな基準が示されてきている。本稿では、Bybee (1985) が提案する意味的関連性 (semantic relevance) の基準に基づき、語幹の語彙的意味を変えない接辞を屈折接辞として扱い、語幹の語彙的意味を変える接辞を派生接辞として扱う。屈折接辞としては、文末標識 (ムード接辞および焦点呼応接辞)・従属節標識・テンス接

⁶ 金武方言では、語頭に立つ /n/ は成節子音である。

⁷ 服部 (1955) は、*ik-*「行く」の過去形 *i-dza-n* の不規則性を、語幹部分が日本語の「往ぬ」に対応する補充形になっているものとして説明している。一方、本稿と同じく分散形態論の枠組みに立脚する Yoshimoto (2016) は、*ik-*の語幹を書き換える再調整規則 (readjustment rule) を仮定している。

辞・未完了接辞・否定接辞・丁寧接辞・副動詞標識を認め⁸、派生接辞としては、ヴォイス接辞・使役接辞・動詞化辞・接頭辞を認める。

2.2.2 音韻論的分類

語幹に直接付加することができる接辞（テンス接辞に後接する文末標識および従属節標識以外の接辞）は、初頭音にどのような音素があるかによって「母音系接辞」「j系接辞」「t系接辞」に分類することができる。

(10) 接辞の音韻的分類

母音系接辞	j系接辞	t系接辞
-aa 〈意志・勧誘〉	-ju- 〈非過去・未完了〉	-ta- 〈過去〉
-i 〈命令1〉	-jabi- 〈丁寧〉	-te- 〈叙想的テンス〉
-iwa ~ -uwa 〈命令2〉	-jegana 〈同時〉	-ti 〈継起〉
-an- 〈否定〉		-taji 〈並列〉
-ar- 〈ヴォイス〉		
-as- 〈使役〉		

母音系接辞はほとんどの場合、基底形がそのまま表層形式となるが、j系接辞・t系接辞は、語幹との形態素境界にさまざまな音韻規則が適用され、語幹あるいは接辞が基底形とは異なる形で現れることが多い。語幹とj系接辞・t系接辞の形態素境界に適用される音韻規則を以下に示す。

(11) 語幹とj系接辞の形態素境界に適用される音韻規則

a. 語幹末 /r/ 削除規則

$$r \rightarrow \emptyset / _j$$

b. 語幹末 /t, k, g/ 破擦音化規則

$$\left[\begin{array}{l} t \rightarrow t\text{ɕ} \\ k \rightarrow t\text{ɕ} \\ g \rightarrow d\text{z} \end{array} \right] / _j$$

c. /j/ 削除規則

$$j \rightarrow \emptyset / C_$$

⁸ 動詞を語として完成させるために必須の要素か否かという義務性 (obligatoriness) の基準に基づくならば、義務的要素ではない未完了接辞・否定接辞・丁寧接辞は、派生接辞と分類されることになる。

(12) 語幹とt系接辞の形態素境界に適用される音韻規則

a. 破擦音化規則

$t \rightarrow t\text{ɕ} / \{ \#(C)i(r), s, t, k, g \} _$

b. 有声化規則

$t(\text{ɕ}) \rightarrow d(\text{z}) / VC_{[+voice]} _$

c. 促音便化規則

$r \rightarrow t / \#(C)i _ t$

d. 語幹末子音削除規則

$C_{[\neq t]} \rightarrow \emptyset / _ t$

以上の音韻規則の具体的な適用例については、各接辞の項目でみることにする。

3. 屈折形態論

3.1 文末標識

文を終止する動詞は、必ず文末標識を伴う。文末標識には、希求法・直説法・疑問法などのムードを担う接辞と、文中の焦点助詞や疑問詞と呼応する焦点呼応接辞がある⁹。

3.1.1 希求法のムード接辞

希求法の文はテンスが分化せず、ムード接辞が動詞語幹に直接付加する形をとる。希求法のムード接辞には、〈意志・勧誘〉の-aa、〈命令1〉の-i、〈命令2〉の-iwa ~ -uwa、〈禁止1〉の-ki、〈禁止2〉の-kiwa ~ -kuwaがある。〈禁止〉の接辞は、動詞の否定形（→3.5節）に付加する。

(13) 希求法のムード接辞の語例

語幹	接辞形式	意味機能	表層形式
kak-「書く」	-aa	〈意志・勧誘〉	kak-aa
	-i	〈命令1〉	kak-i
	-iwa ~ -uwa	〈命令2〉	kak-iwa ~ kak-uwa
	-an-ki	〈禁止1〉	kak-an-ki
	-an-kiwa ~ -an-kuwa	〈禁止2〉	kak-an-kiwa ~ kak-an-kuwa

⁹ 文末標識に後接する〈念押し〉の=joo、〈主張〉の=doo、〈伝聞〉の=ni、〈真偽疑問〉の=naaなどの「終助詞」は、文末標識とは別個の文法カテゴリとして区別されなければならない。

〈命令1〉の*-i*・〈命令2〉の*-iwa*が非前舌母音語幹動詞（例：*wara*-「笑う」）に付加するとき、連母音/ai/を融合して[e]に書き換える音韻規則が適用され、表層形式はそれぞれ*ware*、*warewa*となる。

不規則変化語幹の*k*-「来る」に後接する命令接辞は、専用の異形態が用いられ、〈命令1〉が*k-uu*、〈命令2〉が*k-uuwa*となる。

否定接辞の不定形*-an-na*（→3.7.1節）と補助動詞*uk*-「おく」の命令形を組み合わせ、〈禁止〉を表現する構文もある（例：*ɕikor-an-na uk-i*「作るな」）。〈禁止〉のムード接辞*-ki*・*-kiwa*～*-kuwa*は、この構文で用いられる*uk*-「おく」の命令形*uk-i*・*uk-iwa*～*uk-uwuwa*が文法化したものと考えられる。

沖縄語首里方言などで用いられる〈禁止〉のムード接辞*-(ɾ) una*（例：*kak-una*「書くな」）は、金武方言では用いられない。

3.1.2 直説法のムード接辞

直説法のムード接辞には、〈叙実〉の*-n*と〈確信〉の*-sa*がある。〈叙実〉の*-n*は、客観的事実を述べる文で用いられ、〈確信〉の*-sa*は、聞き手にとって新情報となる内容を、話し手が確信をもって伝達するときなどに用いられる。いずれもテンス接辞に後接する。

(14) 直説法のムード接辞の語例

語幹	接辞形式	意味機能	テンス	表層形式
<i>kak</i> -「書く」	<i>-n</i>	〈叙実〉	非過去	<i>katɕ-u-n</i> 「書く」
			過去	<i>ka-tɕa-n</i> 「書いた」
	<i>-sa</i>	〈確信〉	非過去	<i>katɕ-u-sa</i> 「書くよ」
			過去	<i>ka-tɕa-sa</i> 「書いたよ」

3.1.3 疑問法のムード接辞

疑問法のムード接辞には、肯定・否定を尋ねる〈真偽疑問〉の*-ɾ*、*-(s)se*、聞き手の意志の有無を尋ねる〈意志疑問〉の*-mi*、〈確認要求〉の*-ha(n)ni*、〈疑念表明〉の*-kaja*などがある。いずれもテンス接辞に後接する。疑問詞疑問文で用いられる*-ga*や*-ra*については、次節で扱う。

(15) 疑問法のムード接辞の語例

語幹	接辞形式	意味機能	テンス	表層形式	
kak-「書く」	-:	〈真偽疑問1〉	非過去	katc-u-u「書く？」	
			過去	ka-tca-a「書いた？」	
	-(s)se	〈真偽疑問2〉	非過去	katc-u-se「書くのか？」	
			過去	ka-tca-se「書いたのか？」	
	-mi	〈意志疑問〉	非過去	肯定	katc-u-mi「書くか？」
				否定	kak-an-i「書かないか？」
			過去	-	
	-ha(n)ni	〈確認要求〉	非過去	katc-u-hani「書くんだろう？」	
			過去	ka-tca-hani「書いたんだろう？」	
	-kaja	〈疑念表明〉	非過去	katc-u-kaja「書くかな」	
			過去	ka-tca-kaja「書いたかな」	

〈真偽疑問2〉の-(s)seは、やや軽侮的なニュアンスを含んでおり、聞き手が話し手の同輩または目下の相手である談話状況で用いられる。次の例文は、年長者Aと年少者Bの会話である。

- (16) A : wata+goro:=nu a-Ø-sse?
 お腹+苦しい=FOC ある-NPST-YNQ.PJR
 「お腹が痛いのか？」
 B : un.
 「うん」

〈真偽疑問2〉の文が下降調のイントネーションで発話されるときは、〈非難〉または〈あざけり〉のニュアンスになる。

- (17) naada uki-tuur-an-se! (↘)
 まだ 起きる-SEQ.いる-NEG-YNQ.PJR
 「まだ起きていないのか！」

- (18) ꞥicci, uppi=ngwa: de-Ø-sse (↘)
 INTJ 全部(少量)=DIM FOC.COP-NPST-YNQ.PJR
 「なんだ、たったそれだけか」

〈意志疑問〉の *-mi* は、否定接辞に後接する場合、*/m/* が脱落する。また、〈意志疑問〉はもっぱら聞き手の意志をたずねる疑問文で用いられる。したがって、過去テンス接辞や状態動詞とは共起しない。

3.1.4 焦点呼応接辞

焦点呼応接辞は、文中の焦点助詞や疑問詞と呼応して現れる文末標識である。焦点助詞 *=ru* と呼応する *-ru*、疑問焦点助詞 *=ga* と呼応する *-ra*、疑問詞と呼応する *-ga* の3つが挙げられる。

(19) 焦点呼応接辞の語例

語幹	接辞形式	呼応する要素	テンス	用例
<i>num-</i> 「飲む」	<i>-ru</i>	焦点助詞	非過去	<i>saki=<u>ru</u> num-i-ru</i> 「(他ではなく) 酒を飲むのだ」
			過去	<i>saki=<u>ru</u> nu-da-ru</i> 「(他ではなく) 酒を飲んだのだ」
	<i>-ra</i>	疑問焦点助詞	非過去	<i>saki=<u>ga</u> num-i-ra</i> 「酒を飲むのだろうか」
			過去	<i>saki=<u>ga</u> nu-da-ra</i> 「酒を飲んだのだろうか」
	<i>-ga</i>	疑問詞	非過去	<i><u>nuu</u> num-i-ga?</i> 「何を飲むのか？」
			過去	<i><u>nuu</u> nu-da-ga?</i> 「何を飲んだのか？」

焦点呼応の現象は、「係り結び」と呼ばれることもある（上村1963、宮良2000など）。文末標識の *-ru* は、文中に焦点助詞がある場合に限りて出現するという点で、焦点助詞との一定の呼応関係が認められる。たとえば、文中に焦点助詞がある場合に、文末を直説法〈叙実〉のムード接辞 *-n*（→3.1.2節）で結ぶことはできない。

(20) **saki=ru num-i-**n***

酒 = FOC 飲む - NPST-IND

しかし、文中に焦点助詞がある場合には必ず *-ru* が現れるというわけではなく、直説法〈確信〉の *-sa*、疑問法〈確認要求〉の *-hani*、〈説明〉の *-suga*（→3.2.3節）など、さまざまな文末標識が現れることができる。

- (21) *saki=ru num-i-{sa/hani/suga}*
 酒=FOC 飲む-NPST-[IND.CRTN/CNF/CNC]

「(他ではなく) 酒を飲むよ／飲むんだろう?／飲むんだよ」

また、文中に焦点助詞があり、かつ、述語に〈主張〉の=*doo*や〈伝聞〉の=*ni*などの終助詞が後接する場合は、文末には焦点呼応接辞-*ru*ではなく、直説法〈叙実〉のムード接辞-*n*が現れる。

- (22) a. *ja=nde haru=nde muru migu-ti=ru t-tca-{n/*ru}=doo*
 家=ADT 畑=ADT 全部 巡る-SEQ=FOC 来る-PST-[IND/FCCD]=ASR

「家も畑も全部見回ってきたんだよ」

- b. *magii-ku abe-:=ru e-i+nsee-ta-{n/*ru}=ni*
 大きい-ADV 叫ぶ-INF=FOC する-INF+HON.IPFV-PST-[IND/FCCD]=HS

「大きな声でお叫びになりよったそうだ」

直説法〈叙実〉のムード接辞-*n*と焦点呼応接辞-*ru*は相補分布をなしており、両者は同一の形態素の異形態だと考えられる。抽象的な直説法〈叙実〉のムード接辞Mood_[Ind]を仮定し、その異形態選択規則¹⁰を次のように定式化することで、その分布を捉えることができる。

- (23) 直説法〈叙実〉のムード接辞Mood_[Ind]の異形態選択規則

Mood_[Ind] ↔ -*ru* / [Sentence ... =*ru* ...]

Mood_[Ind] ↔ -*n*

音形が指定されていない抽象的な形態素を仮定し、その形態素が現れる環境によって事後的に異形態が選択されるという分析方法は、分散形態論 (Distributed Morphology: Halle and Marantz 1993) の「後期挿入 (Late Insertion)」の考え方を取り入れたものである。本稿では、焦点呼応接辞のほかにも、非過去接辞・未完了接辞・否定接辞・丁寧接辞・使役接辞などの異形態の分布を捉えるために、この方法論を取り入れた分析を提示する。

¹⁰ 異形態選択規則は、構造記述がより特定のなものから順に適用される。構造記述が指定されていない最終形の規則によって選択される異形態は、非該当形 (elsewhere form) すなわちデフォルト形である。なお、分散形態論では、異形態選択規則のことを「語彙挿入 (Vocabulary Insertion)」と呼ぶ。本稿では、理論特定の術語の使用を避けるために、「異形態選択規則」の語を用いることとする。

3.2 従属節標識

テンス接辞に後接して従属節の述部を構成する接辞を、本稿では「従属節標識」と総称する。従属節標識には、名詞節をつくる「準体接辞」、連体節をつくる「連体接辞」、副詞節をつくる「接続接辞」がある。

3.2.1 準体接辞

準体接辞-*su*は、節を名詞化して「(～する) こと／もの／人」を表すはたらきをもつ接辞である。機能的には日本語の準体助詞「の」に類似するが、金武方言の準体接辞-*su*は、動詞を語として完成させる接辞であり、日本語の準体助詞「の」のように語境界に付加する接語ではない。

(24) 準体接辞の語例

語幹	テンス	表層形式
<i>num</i> -「飲む」	非過去	<i>num-i-su</i> 「飲むこと／もの／人」
	過去	<i>nu-da-su</i> 「飲んだこと／もの／人」

準体接辞の-*su*には、〈真偽疑問〉や〈想起要求〉、〈注意喚起〉のムードを表す文末用法もある。

(25) 準体接辞の文末用法

a. 〈真偽疑問〉

suu=ja saki num-i-su?

今日=TOP 酒 飲む-NPST-NMLZ

「今日はお酒を飲むの？」

b. 〈想起要求〉

kinu=n nu-da-su

昨日=ADT 飲む-PST-NMLZ

「昨日も飲んだじゃないか」

c. 〈注意喚起〉

kuma=nake a:-su

ここ=DAT ある-NPST-NMLZ

「ここにあるじゃないか」

3.2.2 連体接辞

連体接辞は、連体修飾節の述部となる動詞の形式（いわゆる「連体形」）をつくる接辞である。金武方言の連体接辞には *-nu* と *-ru* がある。生産的に用いられるのは *-nu* であり、*-ru* は、*ussa* 「全部（多量）」、*uppi* 「全部（少量）」 など特定の名詞や、モーダル助詞 *=hazu* 「（～する）だろう」、接続助詞 *=ka* 「（～する）ほど」、副助詞 *=madi* 「（～する）まで」 など特定の要素が後続する場合に限って用いられる。

(26) 連体接辞の語例

語幹	連体形 1	連体形 2
<i>num-</i> 「飲む」	<i>num-i-nu t̚cuu</i> 「飲む人」 <i>num-i-nu mizu</i> 「飲む水」	<i>num-ar-i-ru ussa</i> 「飲めるだけの量」 <i>num-i-ru=hazu</i> 「飲むだろう」

3.2.3 接続接辞

接続接辞は、テンス接辞に後接して副詞節をつくる屈折接辞である。金武方言の接続接辞には、次のようなものがある。

(27) 接続接辞の語例

語幹	接辞形式	意味機能	テンス	表層形式
<i>cikor-</i> 「作る」	<i>-kutu</i>	原因・理由・順接	非過去	<i>ciko-:-kutu</i> 「作るので／作ると」
			過去	<i>ciko-ta-kutu</i> 「作ったので／作ったところ」
	<i>-ruwa</i>	原因・理由・順接	非過去	<i>ciko-Ø-ruwa</i> 「作るので／作ると」
			過去	<i>ciko-ta-ruwa</i> 「作ったので／作ったところ」
	<i>-munu</i>	原因・理由・逆接	非過去	<i>ciko-:-munu</i> 「作るので／作るのに」
			過去	<i>ciko-ta-munu</i> 「作ったので／作ったのに」
	<i>-suga</i>	逆接	非過去	<i>ciko-:-suga</i> 「作るけど」
			過去	<i>ciko-ta-suga</i> 「作ったけど」

〈原因・理由・順接〉の *-ruwa* は接辞初頭音が共鳴音であるため、後述する長音化キャンセル規則①（→ 3.3.1 節（30b））が適用され、非過去テンス接辞 *-:-* が削除されている。

〈逆接〉の *-suga* には、文末用法もある。文末で用いられる *-suga* は、〈逆接〉ではなく、ある事態に対する事情や背景を〈説明〉する意味機能を担う。

- (28) *jaa=ru ju-du-suga*
 2SG=FOC 呼ぶ-SEQ. いる -CNC
 「お前を呼んでいるんだよ」

3.3 テンス

3.3.1 非過去

非過去のテンス接辞は複数の具現形があり、前接する語幹の種類に応じて、*-i-*、*-ju-*、*-Ø*のいずれかの異形態が選択される。これらの異形態は、いずれか1つを基本形として他の2つの異形態を一般性の高い音韻規則によって導くことは困難である。本稿では単純非過去のテンス接辞を、具体的な音形を指定されていない抽象的な形態素 $T_{[-past]}$ として解釈する。 $T_{[-past]}$ の具現形は、(29)の異形態選択規則により、前接する動词语幹の種類に応じて指定されるものとする。

- (29) 非過去接辞 $T_{[-past]}$ の異形態選択規則

$$\begin{aligned} T_{[-past]} &\leftrightarrow \text{-}\dot{\text{i}}\text{-} / \{V_{+front}, r\}\text{-}_\text{ } \\ T_{[-past]} &\leftrightarrow \text{-}\dot{\text{i}}\text{-} / \{V_{-front}, C_{+labial}, n\}\text{-}_\text{ } \\ T_{[-past]} &\leftrightarrow \text{-}\textit{ju}\text{-} \end{aligned}$$

$T_{[-past]}$ の異形態が決定された後、語幹と $T_{[-past]}$ の接辞境界にはさまざまな音韻規則が適用される。

- (30) a. 語幹末 /r/ 削除規則
 $r \rightarrow \emptyset / \text{-}\dot{\text{i}}\text{-}$
 b. 長音化キャンセル規則①
 $\text{:} \rightarrow \emptyset / \#(C)V\text{-}[+sonor]$
 c. 長音化キャンセル規則②
 $\text{:} \rightarrow \emptyset / (C)V\text{-}$
 d. 母音融合規則
 $ai \rightarrow e$
 e. 語幹末 /t, k, g/ 破擦音化規則 = (11b)
- $$\left[\begin{array}{l} t \rightarrow t\text{ç} \\ k \rightarrow t\text{ç} \\ g \rightarrow d\text{z} \end{array} \right] / \text{-}\dot{\text{i}}\text{-}$$

f. /j/ 削除規則 = (11c)

j → Ø / C_

前舌母音語幹およびr語幹に後接する T_[past] に挿入される /-:/ は、語幹末の音節核母音を長音化する特殊モーラ音素である。語幹末r削除規則は、音韻的に解釈できない*r という音素連鎖を回避するために適用される。長音化キャンセル規則①は、初頭音が共鳴音の接辞（直説法〈叙実〉のムード接辞-n など）が後接するときなどに適用される。この規則により、*tur-*「取る」の非過去形の表層形式は *tu-Ø-n* となるが、これは非過去接辞として初めから-Ø-が選択されたものと考えるのは妥当ではない。なぜなら、初頭音が阻害音の接辞（準体接辞の-su や、〈理由〉を表す副詞節接辞の-kutu など）が後接する場合、非過去接辞は /-:/ として実現するからである（cf. *tu-:-su*「取るもの」、*tu-:-kutu*「取るから」）。長音化キャンセル規則②は、「単音節内の連母音は2モーラまで」という音節構造上の制約を満たすための規則であり、長音化キャンセル規則①とは性質を異にする。

(31) 各語幹の非過去形

語幹の種類			語幹	基底表示	音韻規則	表層形式
I 類	前舌母音語幹	μ=1	<i>ni</i> -「煮る」	/ni-:-n/	(30b)	<i>ni-Ø-n</i>
		μ≥2	<i>uki</i> -「起きる」	/uki-:-n/	(30b)	<i>uki-Ø-n</i>
	r 語幹	μ=1	<i>tur</i> -「取る」	/tur-:-n/	(30a, b)	<i>tu-Ø-n</i>
		μ≥2	<i>cikor</i> -「作る」	/sikor-:-n/	(30a, b)	<i>ciko-Ø-n</i>
			<i>koor</i> -「買う」	/koor-:-n/	(30a, c)	<i>koo-Ø-n</i>
II 類	非前舌母音語幹		<i>wara</i> -「笑う」	/wara-i-n/	(30d)	<i>ware-n</i>
	b 語幹		<i>asub</i> -「遊ぶ」	/asub-i-n/		<i>asub-i-n</i>
	m 語幹		<i>num</i> -「飲む」	/num-i-n/		<i>num-i-n</i>
	n 語幹		<i>cin</i> -「死ぬ」	/sin-i-n/		<i>cin-i-n</i>
III 類	s 語幹		<i>koos</i> -「壊す」	/koos-ju-n/	(30f)	<i>koos-u-n</i>
	t 語幹		<i>mat</i> -「待つ」	/mat-ju-n/	(30e, f)	<i>matç-u-n</i>
	k 語幹		<i>kak</i> -「書く」	/kak-ju-n/	(30e, f)	<i>katç-u-n</i>
	g 語幹		<i>wiig</i> -「泳ぐ」	/wiig-ju-n/	(30e, f)	<i>wiiz-u-n</i>

3.3.2 叙実的過去と叙想的過去

過去のテンス接辞には、発話時以前に成立した事象を客観的事実として述べる形式と、話し手の心的態度を前景化して述べる形式がある。本稿では、前者を「叙実的過去」または単に「過去」と呼び、後者を「叙想的過去」と呼ぶ。

本稿が「叙想的過去」と呼ぶ形式は、上村（1963）、生塩（1982）などの先行研究で「確言過去」と呼ばれている。しかし、この形式がもつ用法は、確言（本稿では〈痕跡に基づく推論〉と呼ぶ）に限られたものではなく、〈発見〉〈想起〉〈確認〉〈驚嘆〉〈反実仮想〉など多岐にわたっている（cf. 工藤ほか2007）。日本語にも、〈発見〉〈想起〉〈確認〉などを過去の「タ」で表す形式があり、日本語学ではこの形式を「叙想的テンス」「ムードのタ」などと呼んでいる（寺村1984）。

日本語の叙想的テンスが過去のテンス接辞と同じ「タ」を用いるのに対し、沖縄語・国頭語の叙實的過去と叙想的過去は、異なる接辞（金武方言では *-ta-* と *-te-*）によって標示される。

-ta- と *-te-* は、いずれも「t系接辞」であり、語幹との形態素境界にさまざまな音韻規則が適用される。以下に、音韻規則が適用された後の表層形式を示す¹¹。

(32) 各語幹の叙實的過去形と叙想的過去形

語幹の種類		語幹	音韻規則	叙実的過去形	叙想的過去形	
前舌母音語幹		μ= 1	<i>ci</i> -「着る」	(12a)	<i>ci-tea-n</i>	<i>ci-tee-sa</i>
		μ≥ 2	<i>uki</i> -「起きる」		<i>uki-ta-n</i>	<i>uki-te-sa</i>
r 語幹	V _{≠i_}	μ= 1	<i>tur</i> -「取る」	(12d)	<i>tu-ta-n</i>	<i>tu-te-sa</i>
		μ≥ 2	<i>cikor</i> -「作る」	(12d)	<i>ciko-ta-n</i>	<i>ciko-te-sa</i>
	i ₋	μ= 1	<i>cir</i> -「切る」	(12a, c)	<i>cit-tea-n</i>	<i>cit-tee-sa</i>
		μ≥ 2	<i>sunkir</i> -「つねる」	(12a)	<i>sunki-tea-n</i>	<i>sunki-tee-sa</i>
非前舌母音語幹		<i>wara</i> -「笑う」		<i>wara-ta-n</i>	<i>wara-te-sa</i>	
b 語幹		V ₋	<i>asub</i> -「遊ぶ」	(12b, d)	<i>asu-da-n</i>	<i>asu-de-sa</i>
		n ₋	<i>ninb</i> -「眠る」	(12d)	<i>nin-ta-n</i>	<i>nin-te-sa</i>
m 語幹		<i>num</i> -「飲む」	(12b, d)	<i>nu-da-n</i>	<i>nu-de-sa</i>	
n 語幹		<i>cin</i> -「死ぬ」	(12a, b, d)	<i>ci-dza-n</i>	<i>ci-dze-sa</i>	
s 語幹		<i>koos</i> -「壊す」	(12a, d)	<i>koo-tea-n</i>	<i>koo-tee-sa</i>	
t 語幹		<i>mat</i> -「待つ」	(12a, d)	<i>mat-tea-n</i>	<i>mat-tee-sa</i>	
k 語幹		<i>kak</i> -「書く」	(12a, d)	<i>ka-tea-n</i>	<i>ka-tee-sa</i>	
g 語幹		<i>wiig</i> -「泳ぐ」	(12a, b, d)	<i>wii-dza-n</i>	<i>wii-dze-sa</i>	

¹¹ 叙想的過去はモーダルな意味を表す形式であるため、直説法〈叙実〉のムード接辞 *-n* とは共起しにくい。自然談話では〈確信〉のムード接辞 *-sa* と共起する例がほとんどであるため、表中でも〈確信〉のムード接辞 *-sa* が付加した語形を示している。

3.3.2.1 叙想的過去の用法

以下に、叙想的過去の各用法の例文を示す。叙想的過去の接辞には、MPST (modal past) のグロスを付している。

(33) a. 発見

kuma=katei=ru aa-te-sa=jaa

ここ=DIR=FOC ある-MPST-IND.CRTN=ADR

「[探していたものを発見して] ここにあったんだね」

b. 想起

suu=ja dzuuguja ee-te-sa=jaa

今日=TOP 十五夜 COP-MPST-IND.CRTN=ADR

「[忘れていたことを思い出して] 今日は十五夜だったね」

c. 確認

kuma=ja heesai haakaa de-te-sa=jaa

ここ=TOP 昔 墓 FOC.COP-MPST-IND.CRTN=ADR

「ここは昔、墓だったんだよね」

d. 驚嘆

Taroo=ga t-tcee-sa=jaa!

太郎=NOM 来る-MPST-IND.CRTN=ADR

「[来ないと思っていた太郎を見て] 太郎が来たんだね！」

e. 痕跡に基づく推論

kuma=katei tcuu=nu jaa=nu aa-te-sa=jaa

ここ=DIR 人=GEN 家=NOM ある-MPST-IND.CRTN=ADR

「ここに人の家があったんだろうね」

f. 反実仮想

saki=nu ne-n-na nar-an-na=jija, itcu=madi=n

酒=NOM ない-NEG-INF なる-NEG-INF=COND, いつ=LMT=ADT

nu-di=ru uu-te-sa=jaa

飲む-SEQ=FOC いる-MPST-IND.CRTN=ADR

「酒がなくならなかったら、いつまでも飲んでいただろうね」

3.3.2.2 叙想的過去と結果継続アスペクト

叙想的過去の接辞 *-te-* は、継起接辞 *-ti-* (→ 3.7.2 節) とアスペクト補助動詞 *ar-* が音韻融合した結果継続アスペクトの形式から派生したものと考えられる (cf. 工藤ほか2007)。

しかし、叙想的過去の接辞と結果継続アスペクトの形式は、共時的には2つの異なる形式として区別すべきであるとの主張が先行研究においてなされている (cf. 宮良 2002、Arakaki 2010)。その理由として、主に次の2点が挙げられる。第一に、叙想的過去の接辞は状態動詞と共起できる。状態動詞はアスペクトが分化しないため、状態動詞に付加した *-te-* は結果継続アスペクトの形式ではありえない。第二に、叙想的過去の接辞と結果継続アスペクトの形式は、一つの語の中で共起することができる。したがって、それぞれ異なる文法カテゴリに属する要素であると解釈すべきである。

さらに、叙想的過去と結果継続アスペクトの形式を区別すべき根拠として、述語の焦点化による形態素分離の可否を加えることができる。たとえば、(34)の文は、叙想的過去の用法である〈驚嘆〉の解釈と、〈結果継続〉の解釈の両方が可能である。しかし、(35)のように、動詞の接続形の部分に焦点助詞 *=ru* を付加して、継起接辞の *-ti* とアスペクト補助動詞 *ar-* の部分を分離すると、叙想的テンスの〈驚嘆〉の解釈が失われ、結果継続アスペクトの解釈のみが可能となる。

(34) *ottoo=gā juuban ciko-te-sa=jāa*

- i. 〈驚嘆〉解釈：「お父さんが夕飯を作ったんだ！」→ OK
- ii. 〈結果継続〉解釈：「お父さんが夕飯を作ってあるね」→ OK

(35) *ottoo=gā juuban ciko-ti=ru aa-sa=jāa*

- i. 〈驚嘆〉解釈 → NG
- ii. 〈結果継続〉解釈 → OK

結果継続アスペクト構文では、継起接辞の *-ti* とアスペクト補助動詞 *ar-* がそれぞれ独立した形態素としての地位を保っているのに対し、叙想的過去の *-te-* は、分離不可能な一個の形態素となっていると考えるのが妥当であろう。

3.4 未完了

未完了接辞は、叙實的過去または叙想的過去のテンス接辞と共起し、〈回想〉〈未遂〉〈目撃〉などを表す特殊なアスペクト形式をつくる接辞である。本稿では、鈴木 (1960) にならい、この形式を未完了過去と呼ぶ。

未完了接辞は、非過去接辞と同様のパターンを示し、前接する語幹がⅠ類ならば *-i-*、Ⅱ類ならば *-i-*、Ⅲ類ならば *-ju-* の異形態が選択される。

(36) 各語幹の未完了過去形

語幹			語幹	基底表示	音韻規則	音声形式
Ⅰ類	前舌母音語幹	μ = 1	<i>ni-</i> 「煮る」	/ni-:-ta-n/		<i>ni-i-ta-n</i>
		μ ≥ 2	<i>uki-</i> 「起きる」	/uki-:-ta-n/		<i>uki-i-ta-n</i>
	r 語幹	μ = 1	<i>tur-</i> 「取る」	/tur-:-ta-n/	(30a)	<i>tu-u-ta-n</i>
		μ ≥ 2	<i>cikor-</i> 「作る」	/sikor-:-ta-n/	(30a)	<i>ciko-o-ta-n</i>
			<i>koor-</i> 「買う」	/koor-:-ta-n/	(30a, c)	<i>koo-Ø-ta-n</i>
Ⅱ類	非前舌母音語幹		<i>wara-</i> 「笑う」	/wara-i-ta-n/	(30d)	<i>ware-ta-n</i>
	m 語幹		<i>num-</i> 「飲む」	/num-i-ta-n/		<i>num-i-ta-n</i>
	n 語幹		<i>cin-</i> 「死ぬ」	/sin-i-ta-n/		<i>cin-i-ta-n</i>
	b 語幹		<i>asub-</i> 「遊ぶ」	/asub-i-ta-n/		<i>asub-i-ta-n</i>
Ⅲ類	s 語幹		<i>koos-</i> 「壊す」	/koos-ju-ta-n/	(30f)	<i>koosu-ta-n</i>
	t 語幹		<i>mat-</i> 「待つ」	/mat-ju-ta-n/	(30e, f)	<i>mateu-ta-n</i>
	k 語幹		<i>kak-</i> 「書く」	/kak-ju-ta-n/	(30e, f)	<i>kateu-ta-n</i>
	g 語幹		<i>wiig-</i> 「泳ぐ」	/wiig-ju-ta-n/	(30e, f)	<i>wiizu-ta-n</i>

本稿では未完了接辞を、未完了素性をもったアスペクト接辞 $\text{Asp}_{[\text{perf}]}$ と考える。 $\text{Asp}_{[\text{perf}]}$ は、次の規則によって異形態が選択される。

(37) 未完了接辞 $\text{Asp}_{[\text{perf}]}$ の異形態選択規則

$\text{Asp}_{[\text{perf}]} \leftrightarrow \text{-i-} / \{V_{+\text{front}}, r\}\text{-}_\text{--}$

$\text{Asp}_{[\text{perf}]} \leftrightarrow \text{-i-} / \{V_{-\text{front}}, C_{+\text{labial}}, n\}\text{-}_\text{--}$

$\text{Asp}_{[\text{perf}]} \leftrightarrow \text{-ju-}$

未完了接辞は、否定接辞（→3.5節）および丁寧接辞（→3.6節）と共起しない。西岡（2003）によると、沖縄語首里方言では丁寧接辞と未完了接辞が共起した形（例：*jum-abi-i-ta-n*「読みよりました」）が用いられるが、金武方言ではこれに相当する動詞形式がない。

3.5 否定

否定接辞のデフォルト形式は *-an-* である。非過去接辞 $T_{[\text{past}]}$ は、否定接辞に後接する場合はゼロ形態素となる。テンスが非過去で、モードが直説法〈叙実〉の場合、*s-*「する」の否定形の基底表示は */s-an-Ø-n/* となるが、音節構造上、コーダ位置の子音連続 **nn* は許されないため、*/n/* が一つ削除され、表層形式は *s-an*「しない」となる。

否定接辞 *-an-* が *wara-* 「笑う」、*umu-* 「思う」などの非前舌母音語幹に付加する場合、基底形はそれぞれ */wara-an/*、*/umu-an/* となるが、表層形式では語幹末の母音が削除され、*war-an* 「笑わない」、*um-an* 「思わない」となる。

不規則変化語幹の *ar-* 「ある」と *e-* 「である」に否定接辞が付加するときは、補充形語幹が用いられる。それぞれの否定形は、*ne-n* 「ない」、*ar-an* 「でない」となる。*ar-* 「ある」の否定形は、語幹が補充形の *ne-* 「ない」に入れ替わった上に、さらに否定接辞が付加した形となっている。*ne-* は形式的には前舌母音語幹であるから、否定接辞 *-an* が付加する場合は、規則に従えば */r/* が挿入されて **ne-r-an* となることが予想される。沖縄語首里方言などでは、*nee-r-an* の語形が実際に用いられるが、金武方言には **ne-r-an* ないし **nee-r-an* の語形が存在しない。**ne-r-an* を正しく排除するためには、*ne-* に後接する否定接辞の異形態 *-n-* を設定しなければならない。また、不規則変化語幹 *k-* 「来る」の否定形は *k-un* となるため、*k-* に後接する場合の異形態 *-un-* も設定する必要がある。

(38) 否定接辞 Neg の異形態選択規則

Neg $\leftrightarrow$ *-n-* / *ne-*_

Neg $\leftrightarrow$ *-un-* / *k-*_

Neg $\leftrightarrow$ *-an-*

否定接辞に過去接辞が後接する場合、過去接辞がそのまま否定接辞に付加する形式 (*s-an-ta-n* 「しなかった」) のほかに、過去接辞と否定接辞の間に *-na-* が挿入される形式 (*s-an-na-ta-n* 「しなかった」) がある。両形式は自由に交替するため、この *-na-* はいかなる文法的役割も果たしていないといえる。したがって、この *-na-* は、何らかの形態素が具現化したものではなく、一種の挿入音 (epenthesis) とみるべきであろう。なお、インフォーマントによると、*-na-* が挿入された形式の方が古風な響きがあるという。この形式は現在廃れつつある。

3.6 丁寧

丁寧体は、聞き手に対する丁寧さを表す形式であり、無標の「常体」に対立する。金武方言の動詞の丁寧体は、丁寧接辞 *-jabi-* によって標示される。

-jabi- は、前舌母音語幹と非前舌母音語幹に付加する場合はそのままの形態で現れるが、その他の語幹に付加する場合は、接辞初頭音の */j/* が音韻規則(11)の適用を誘発する。*-jabi-* 自体は、前舌母音語幹のパターンで屈折する。

(39) 各語幹の丁寧体

語幹の種類	語幹	基底表示	音韻規則	音声形式
前舌母音語幹	<i>uki-</i> 「起きる」	/uki-jabi-Ø-n/	—	<i>uki-jabi-n</i>
r 語幹	<i>cikor-</i> 「作る」	/sikor-jabi-Ø-n/	(11a)	<i>ciko-jabi-n</i>
非前舌母音語幹	<i>wara-</i> 「笑う」	/wara-jabi-Ø-n/	—	<i>wara-jabi-n</i>
m 語幹	<i>num-</i> 「飲む」	/num-jabi-Ø-n/	(11b)	<i>num-abi-n</i>
n 語幹	<i>cin-</i> 「死ぬ」	/sin-jabi-Ø-n/	(11b)	<i>cin-abi-n</i>
b 語幹	<i>asub-</i> 「遊ぶ」	/asub-jabi-Ø-n/	(11b)	<i>asub-abi-n</i>
s 語幹	<i>koos-</i> 「壊す」	/koos-jabi-Ø-n/	(11b)	<i>koos-abi-n</i>
t 語幹	<i>mat-</i> 「待つ」	/mat-jabi-Ø-n/	(11c)	<i>matɕ-abi-n</i>
k 語幹	<i>kak-</i> 「書く」	/kak-jabi-Ø-n/	(11c)	<i>katɕ-abi-n</i>
g 語幹	<i>wiig-</i> 「泳ぐ」	/wii-jabi-Ø-n/	(11c)	<i>wiiɕ-abi-n</i>

丁寧接辞が存在動詞の *ar-*「ある」、コピュラ動詞の *e-*「である」に後接する場合、表層形式は **a-jabi-n*、**e-jabi-n* ではなく、*aa-bi-n*、*ee-bi-n* となる。**a-jabi-n*、**e-jabi-n* を正しく排除するために、存在動詞の *ar-* やコピュラ動詞の *e-* に後接する場合の丁寧接辞の異形態 *-bi-* を認める必要がある。丁寧接辞 Pol の異形態選択規則を次のように規定する。

(40) 丁寧接辞 Pol の異形態選択規則

Pol $\leftrightarrow$ *-bi-* / {*ar-*, *e-*}_—

Pol $\leftrightarrow$ *-jabi-*

コピュラ動詞 *e-* の否定で用いられる補充形の *ar-* に付加する丁寧接辞は、存在動詞の *ar-* に付加する場合の異形態 *-bi-* ではなく、デフォルト形の *-jabi-* が付加して *a-jabi-r-an* 「ではありません」となる。

なお、沖縄語首里方言とは異なり、金武方言の丁寧接辞は尊敬補助動詞 *nsoor-* と共起しない。首里方言には *kwi-micee-bi-r-i* 「くださいませ」という表現があるが、これに形態的に対応する形式 (**kwi-nsee-bi-r-i*) は、金武方言では許容されない。

3.7 副動詞標識

テンスまたはムード、あるいはその両方で屈折する動詞を定動詞 (finite verb) というのに対し、テンスやムードで屈折せず、副詞的に機能する節の述語となる動詞を副動詞 (converb) という (Haspelmath 1995)。副動詞は、副動詞標識が語幹に直接付加することによって形成される。本節では、代表的な副動詞標識として、不定接辞を 3.7.1 節で、

継起接辞を 3. 7. 2 節で扱い、その他の副動詞標識については、3. 7. 3 節でまとめて取り上げる。

3. 7. 1 不定接辞

nsoor-「～なさる」、*joos*-「～できる」、*busa*-「～したい」、*gisa*-「～しそう」などの補助動詞・補助形容詞に接続して複合述語を形成したり、焦点接辞=*ru*や=*ga*が付加したりする動詞の形式を、本稿では「不定形」と呼ぶ¹²。

金武方言の不定形は、単純非過去テンス接辞 $T_{[-past]}$ と並行的なパターンを示す。

(41) 不定形と非過去形の比較

	語幹	語幹	不定形	非過去形
I 類	前舌母音語幹	<i>uki</i> -「起きる」	<i>uki</i> -:	<i>uki</i> -:- <i>n</i>
	r 語幹	<i>cikor</i> -「作る」	<i>ciko</i> -:	<i>ciko</i> -:- <i>n</i>
II 類	非前舌母音語幹	<i>waca</i> -「笑う」	/wara-i/ → <i>ware</i>	/wara-i-n/ → <i>ware-n</i>
	b 語幹	<i>asub</i> -「遊ぶ」	<i>asub-i</i>	<i>asub-i-n</i>
	m 語幹	<i>num</i> -「飲む」	<i>num-i</i>	<i>num-i-n</i>
	n 語幹	<i>cin</i> -「死ぬ」	<i>cin-i</i>	<i>cin-i-n</i>
III 類	s 語幹	<i>koos</i> -「壊す」	<i>kooc-i</i>	<i>koos-u-n</i>
	t 語幹	<i>mat</i> -「待つ」	<i>matc-i</i>	<i>matc-u-n</i>
	k 語幹	<i>kak</i> -「書く」	<i>katc-i</i>	<i>katc-u-n</i>
	g 語幹	<i>isug</i> -「急ぐ」	<i>isuz-i</i>	<i>isuz-u-n</i>

金武方言の不定形は、単純非過去テンス接辞 $T_{[-past]}$ と同様の異形態選択規則が、何らかの形態素に適用されることによってつくられると考えられる。本稿では、不定形をつくる副動詞標識を、具体的な音形を指定されていない抽象的な形態素 $T_{[-fin]}$ として解釈する。 $T_{[-fin]}$ の具現形は、(42)の異形態選択規則によって、前接する動詞語幹の種類に応じて指定される。

(42) 不定接辞 $T_{[-fin]}$ の異形態選択規則

$T_{[-fin]} \leftrightarrow na / \text{Neg_}$

$T_{[-fin]} \leftrightarrow : / \{V_{+front}, r\}_-$

¹² 金武方言の不定形は、日本語の連用形に類似するが、両者は全く同じものではない。たとえば、金武方言の不定形は日本語の連用形とは異なり、名詞化用法はない。

$T_{[-fin]} \leftrightarrow i / \{V_{-front}, C_{+labial}, n\} - _$

$T_{[-fin]} \leftrightarrow ji$

3.7.1.1 不定形に助詞が付加する形式

不定形に〈時間的条件〉〈確定条件〉〈移動の目的〉を表す助詞（接続助詞）を後接させて、新たな副動詞をつくることもできる。

(43) 不定形+助詞の語例

形式	意味機能	表層形式
不定形 + =jini	〈時間的条件〉	<i>ciko-Ø=ini</i> 「作るとき」 <i>katc-i=ini</i> 「書くとき」 <i>kam-an-na=ini</i> 「食べないとき」
不定形 + =jija	〈確定条件〉	<i>ciko-Ø=jija</i> 「作ると」 <i>katc-i=jija</i> 「書くと」 <i>kam-an-na=jija</i> 「食べないと」
不定形 + =ga	〈移動の目的〉	<i>ciko-:=ga</i> 「作りに（行く）」 <i>katc-i=ga</i> 「書きに（行く）」

=jija¹³、=jiniなどの助詞が後接する場合、前舌母音語幹や_r語幹の動詞の不定接辞-:は削除される。これは、後接する接辞の初頭音が共鳴音の場合に適用される（30b）の長音化キャンセル規則①が適用されるためである。〈移動の目的〉を表す=gaは、否定接辞とは共起しない。

3.7.2 継起接辞

日本語の「テ形」に相当する副動詞の形式を、本稿では「接続形」と呼ぶ¹⁴。接続形は、語幹に継起接辞-tiが付加することによってつくられる。

¹³ 〈条件〉の助詞=jijaは、焦点助詞=ruが後接する場合、-jiwaとして現れる。

(i) *ndza+munuu=n kam-i=iwa=ru maasa+munuu=ja waka-Ø-n=doo*
 苦い+もの=ADT 食べる-INF=CND=FOC おいしい+もの=TOP わかる-NPST-IND=ASR
 「まずいものも食べるからこそ、おいしいものがあるんだよ」

¹⁴ 琉球諸語の先行研究において、接続形は「第二中止形」と呼ばれることもある。第二中止形の名称は、「第一中止形」(=連用形)と対比したものであるが、金武方言の連用形（本稿では「不定形」と呼ぶ）は、日本語の連用形のように節を中止する機能をもたない。したがって、金武方言の連用形（不定形）を「第一中止形」と呼ぶことも、接続形を「第二中止形」と呼ぶことも適当ではないと考える。

(44) 各語幹の接続形

語幹の種類		語幹	音韻規則	接続形
前舌母音語幹		$\mu=1$	<i>ci</i> -「着る」 (12a)	<i>ci-tei</i>
		$\mu\geq 2$	<i>uki</i> -「起きる」	<i>uki-ti</i>
r語幹	$V_{\neq i_}$	$\mu=1$	<i>tur</i> -「取る」 (12d)	<i>tu-ti</i>
		$\mu\geq 2$	<i>cikor</i> -「作る」 (12d)	<i>ciko-ti</i>
	$i_$	$\mu=1$	<i>cir</i> -「切る」 (12a, c)	<i>cit-tei</i>
		$\mu\geq 2$	<i>ucikir</i> -「切る」 (12a)	<i>uciki-tei</i>
非前舌母音語幹		<i>wara</i> -「笑う」		<i>wara-ti</i>
b語幹	$V_$	<i>asub</i> -「遊ぶ」 (12b, d)		<i>asu-di</i>
	$n_$	<i>ninb</i> -「眠る」 (12d)		<i>nin-ti</i>
m語幹		<i>num</i> -「飲む」 (12b, d)		<i>nu-di</i>
n語幹		<i>cin</i> -「死ぬ」 (12a, b, d)		<i>ci-dzi</i>
s語幹		<i>koos</i> -「壊す」 (12a, d)		<i>koo-tei</i>
t語幹		<i>mat</i> -「待つ」 (12a, d)		<i>mat-tei</i>
k語幹		<i>kak</i> -「書く」 (12a, d)		<i>ka-tei</i>
g語幹		<i>wiig</i> -「泳ぐ」 (12a, b, d)		<i>wii-dzi</i>

継起接辞 *-ti* がコピュラ動詞に後接する場合、動詞の語幹は補充形の *nar-* が用いられる。

- (45) *mukaci=kara=nu narawaci+gutuu na-ti, jami-Ø-nu kutu=n*
 昔 = ABL=GEN 習わし + 事 COP-SEQ やめる -NPST-ADN こと = ADT
na-jabi-r-an-ta-n
 できる -POL-EP-NEG-PST-IND
 「昔からの習わしなので、やめることもできませんでした」

継起接辞が否定接辞に後接する場合、*-ti* は否定接辞にそのまま付加するのではなく、2つの接辞の間には *-na-* が挿入される（例：*s-an-na-ti* 「しないで」）。この形式は、一見すると継起接辞が否定接辞の不定形（*s-an-na*）に付加しているようにもみえる。しかし、不定接辞は語を閉じる接辞であり、*-ti* は語として閉じられていない不完全な形式に付加する接辞であるから、この *-na-* を不定接辞と解釈すると、記述的に矛盾をきたすことになる。したがって、否定接辞と継起接辞の境界に現れるこの *-na-* は、過去接辞が後接するときに現れる *-na-*（→ 3.5 節）と同様に、一種の挿入音（epenthesis）と解釈すべきであろう。

-ti とは別に、否定専用の継起接辞 *-kui* が用いられる場合もある。*-kui* は否定接辞にその

まま付加する（例：*s-an-kui*「しないで」）。

3.7.2.1 接続形に助詞が付加する形式

継起接辞-*ti*は〈累加〉を表す助詞=*n*（日本語の「も」に相当）と複合して、〈逆接条件〉を表す新たな副動詞接辞-*tin*を形成する。否定接辞に-*tin*が付加する場合、-*an-tin* ~ -*an-na-tin*いずれの形も許容される。

(46) 接続形 + 副助詞の形式

形式	意味	肯否	用例
接続形 + = <i>n</i>	逆接条件	肯定	<i>ka-din</i> 「食べても」
		否定	<i>kam-an-tin</i> 「食べなくても」 ~ <i>kam-an-na-tin</i> 「食べなくても」

3.7.3 その他の副動詞標識

不定接辞・継起接辞以外の副動詞標識として、次のものが挙げられる。

(47) その他の副動詞接辞

形式	意味	用例
- <i>jegana</i> - <i>jegatci</i> - <i>jegatcina</i>	付帯状況	<i>ciko-egana</i> 「作りながら」 <i>ciko-egatci</i> 「作りながら」 <i>ciko-egatcina</i> 「作りながら」
- <i>awa</i>	仮定条件	<i>cikor-awa</i> 「作るなら」
- <i>awan</i>	譲歩	<i>cikor-awan</i> 「作ったとしても」
- <i>tante</i>	譲歩	<i>ciko-tante</i> 「作ったとしても」
- <i>tekara</i>	条件	<i>ciko-tekara</i> 「作るなら」
- <i>taji</i>	並列	<i>ciko-taji</i> 「作ったり」

〈付帯状況〉の-*jegana* ~ -*jegatci* ~ -*jegatcina*は、いずれも自由に交替する異形態である。
r 語幹動詞に後接する場合、(11a)の規則が適用され、語幹末の /r/ が削除される。

4. 派生形態論

動詞語根に付加して語幹を形成する接辞を「派生接辞」という。派生接辞には、ヴォイス接辞、使役接辞、動詞化辞、接頭辞などがある。

4.1 ヴォイス

〈受動〉または〈可能〉などのヴォイスは、ヴォイス接辞 $-ar-$ によって標示される。 $-ar-$ は不規則に屈折する。

(48) $-ar-$ の屈折パターン

語幹	命令1	否定	非過去	未完了過去	過去
$kam-ar-$ 「食べられ」	$kam-aar-i$	$kam-ar-an$	$kam-ar-i-n$	$kam-ar-i-ta-n$	$kam-at-ta-n$

また、無音節語幹（→2.1.2節）に付加する場合、 $-ar-$ は長音化して $-aar-$ となる。

- (49) $m-aar-i-n$ 「見える／見られる」 $m-aar-an$ 「見えない／見られない」
 $j-aar-i-n$ 「言える／言われる」 $j-aar-an$ 「言えない／言われない」

4.2 使役

使役の接辞は、動作主項（Agent）をもつ動詞（ $kam-$ 「食べる」などの他動詞、または $asub-$ 「遊ぶ」などの非能格型自動詞）に付加し、項構造に使役者項（Causer）を導入するとともに、基体となる動詞の動作主項に被使役者（Causee）の意味役割を追加する機能がある。

使役接辞には、2つの異形態（ $-as-$ 、 $-imi-$ ）がある。 $-imi-$ はs語幹に後接する場合に選択される異形態で、その他の環境では $-as-$ が選択される。 $-as-$ 自体はs語幹のパターンで屈折し、 $-imi-$ は前舌母音語幹のパターンで屈折する。

(50) 使役接辞Causeの異形態選択規則

Cause $\leftrightarrow$ $-imi-$ / s_

Cause $\leftrightarrow$ $-as-$

4.3 動詞化辞

非使役／使役の語彙的な対をなす動詞は、語根の内部も形態素分析することができる。たとえば、次のような例において、形態素 $-ci-$ 、 $-i-$ 、 $-as-$ は、前接する動詞を「使役化」しているとみることができる。

(51) 「使役化」による使役交替

i-「座る」→ *i-ci*-「座らせる／置く」

tat-「立つ」→ *tat-i*-「立てる」

wak-「沸く」→ *wak-as*-「沸かす」

ci、*i*、*-as* は、どの動詞に付加するかが語彙ごとに決まっており、前節で取り上げた使役接辞のような生産性はない。また、使役交替にかかわるこれらの形態素が付加した動詞の目的語は、状態変化を被る対象 (Patient) としてのみ解釈され、自ら行為する動作主 (Agent) という解釈が成立しないという点でも使役接辞とは異なっている。

使役交替には、無標の他動詞から (非対格型) 自動詞を派生する「逆使役化」と呼ばれる現象もある。たとえば次の例において、形態素 *-i* は前接する他動詞を自動詞化している。

(52) 「逆使役化」による使役交替

ci-「切る」→ *ci-i*-「切れる」

war-「割る」→ *war-i*-「割れる」

yak-「焼く」→ *yak-i*-「焼ける」

自動詞から他動詞を派生する「使役化」や、他動詞から自動詞を派生する「逆使役化」とは異なり、自動詞でも他動詞でもない中立的な要素に異なる形態素を付加することによって、自動詞と他動詞をそれぞれ別個に派生する使役交替現象もある。先行研究において、このような使役交替は「両極化」と呼ばれている (奥津1967)。両極化による使役交替は、使役化や逆使役化よりも多様なパターンを示す。金武方言では、少なくとも6種類のペア「*-ar*／*-i*」「*-r*／*-s*」「*-r*／*-ci*」「*-ri*／*-s*」「*-i*／*-as*」「*-i*／*-us*」が確認されている¹⁵。

(53) 「両極化」による使役交替

ag-ar-「上がる」／*ag-i*-「上げる」

noo-r-「治る」／*noo-s*-「治す」

nu-r-「乗る」→ *nu-ci*-「乗せる」

koo-ri-「壊れる」／*koo-s*-「壊す」

ndz-i-「出る」／*ndz-as*-「出す」

ur-i-「下りる」／*ur-us*-「下ろす」

¹⁵ ここで挙げた6種類のパターン以外にも、語根の変化を伴う不規則な使役交替の例として、*m*-「見る」／*mi-ci*-「見せる」、*ci*-「着る」／*ku-ci*-「着せる」がある。

*ag-*や*noo-*などの「自動詞でも他動詞でもない要素」や、これらの要素を「自動詞化」ないし「他動詞化」している形態素は、いかなるカテゴリに属するものかがさしあたっての問題となる。本稿が依拠している分散形態論では、動詞などの語彙範疇は、レキシコンにおいてあらかじめ範疇（品詞）が指定されているのではなく、範疇中立的な形態素 $\sqrt{\text{ROOT}}$ に動詞化辞 v が付加することによって範疇が指定されると考える（Halle and Marantz 1993、Marantz 1997）。Marantz（1997）は、動詞化辞 v の種類の違いによって、共通の $\sqrt{\text{ROOT}}$ から自動詞や他動詞が派生すると分析している。Marantzらの分析を本稿の分析に当てはめるならば、「自動詞でも他動詞でもない要素」は $\sqrt{\text{ROOT}}$ に相当し、これらの要素から自動詞・他動詞を派生する種々の形態素は、いずれも動詞化辞 v が具現化したものと解釈することができる¹⁶。使役交替する動詞においては、従来の「語根」が $\sqrt{\text{ROOT}}$ と動詞化辞 v に分解されるのである。

この分析方法に基づけば、「使役化」が適用される前の無標の自動詞や、「逆使役化」が適用される前の無標の他動詞は、動詞化辞 v がゼロ形態素 $\emptyset$ として具現化しているものと解釈することができる。つまり、「使役化」と「逆使役化」の違いは、自動詞を派生する v がゼロ形態素として具現化するか、他動詞を派生する v がゼロ形態素として具現化するかの違いに還元されるのである（日本語の使役交替現象について、本稿と同様に分析した先行研究にHarley 2008がある）。

taka-「高い」、*joo-*「弱い」などの属性を表す述語（いわゆる形容詞）を派生する語根に付加して自動詞を派生する*-mar-*や、他動詞を派生する*-mi-*も、動詞化辞 v の具現形の一つと考えられる。

(54) 形容詞語根から自動詞を派生する*-mar-*と他動詞を派生する*-mi-*

taka-mar-「高まる」／*taka-mi-*「高める」

joo-mar-「弱まる」／*joo-mi-*「弱める」

4.4 接頭辞

これまでに見てきた屈折接辞・派生接辞は、いずれも語幹または語根（あるいは $\sqrt{\text{ROOT}}$ ）に後接する「接尾辞」であった。本節では、動詞語根に前接して語幹を形成する「接頭辞」について扱う。動詞に付加する接頭辞は数多く存在するが、ここでは代表的なものとして、*kee-*、*teii-*、*kun-*を取り上げる。

¹⁶ 状態動詞・非能格型自動詞（*energative verb*）・様態動詞（*manner verb*）などの使役交替をしない動詞語根の内部構造については、本稿では問わないこととする。

4. 4. 1 *kee-*

動詞接頭辞*kee-*は生産性が高く、動詞の種類にかかわらず、あらゆる動詞語根に付加する接頭辞である。その意義素は、「語根の意味内容を矮小化すること」である。たとえば、単に*ka-da-n*「食べた」と言う場合に比べ、*kee-ka-da-n*と言う場合は、「軽々と食べてしまった」というニュアンスになる。

また、聞き手に何かを命令・依頼する場合、動詞の語根に*kee-*を付加することによって、その命令・依頼の内容が大きな労力を伴うものではないことを聞き手に示唆し、話し手の心理的負担（他者に何かを命令・依頼することの後ろめたさ）を打ち消す語用論的機能がある。

(55) a. *kee-noos-iwa*

ケー-直す -IMP

「ちょっと直してくれ」

b. *kee-moor-i=joo*

ケー-来る .HON-IMP=ADR

「(お気軽に) いらしてくださいね」

話し手が非難されるおそれのある内容や、人の死など、伝達することが話し手の心理的負担を伴う内容である場合にも *kee-* が用いられる。

(56) a. *kee-waaci-ta-n*

ケー-忘れる -PST-IND

「忘れてしまった」

b. *kee-maa-tca-n*

ケー-亡くなる -PST-IND

「亡くなってしまった」

4. 4. 2 *tcii-*

動詞接頭辞*tcii-*は、動作主 (agent) が主語となる動詞に付加する場合は「素早く～する」、非対格動詞に付加する場合は「急に～する」という意味を語根に添加する。語根の初頭音が /k/ の場合は、*tcik-* として現れる。

(57) a. *tcik-keer-as-u-n*

チー-返る -TR-NPST-IND

「素早くひっくり返す」

b. *tcii-turi:-n*

チー-風ぐ -NPST-IND

「(波や風が) 急に風ぐ」

4.4.3 *kun-*

動詞接頭辞 *kun-* は、他動詞に付加して「力強く～する」「強引に～する」という意味を語根に添加する。

(58) a. *kun-cimi-Ø-n*

クン-締める -NPST-IND

「強く締め付ける」

b. *kun-tu-Ø-n*

クン-取る - NPST-IND

「奪い取る」

5. まとめ

本稿では、金武方言の動詞形態論のうち、屈折形態論と派生形態論を記述した。記述の手段として、生成音韻論及び分散形態論の方法論を採用し、音韻規則だけでは捉えがたい異形態の記述については、分散形態論の「後期挿入」の考え方が有効であることを示した。

各形式の詳細な意味機能の記述や、複合動詞ならびに形容詞の形態論については、稿を改めて論じたい。

略号一覧

ADT	additive 累加	EP	epenthesis 挿入音	NMLZ	nominalizer 名詞化
ADV	adverbial 副詞形	FCCD	focus concord 焦点呼応	NOM	nominative 主格
ADR	addressive 同意要求	FOC	focus 焦点	PJR	pejorative 軽侮的
ASR	assertive 主張	GEN	genitive 属格	PST	past 過去
C	consonant 子音	HON	honorific 尊敬	SEQ	sequential 継起
CAUS	causative 使役	HS	hearsay 伝聞	TOP	topic 主題
CNF	confirmative 確認要求	IMP	imperative 命令	V	vowel 母音
CNC	concessive 逆接	IND	indicative 直說法叙実	YNQ	yes-no question 真偽疑問
COND	conditional 条件形	INF	infinitive 不定	-	接辞境界
COP	copula コピュラ	INTJ	interjection 間投詞	=	接語境界
CRTN	certainty 確信	IPFV	imperfective 未完了	+	複合語内部の要素境界
DAT	dative 与格	LMT	limitative 限界	#	語境界
DIM	diminutive 指小辞	MPST	modal past 叙想的過去	~	自由交替
DIR	directional 方向格	NEG	negative 否定		

参考文献

- 有元光彦 (1993) 「沖縄・首里方言の規則動詞の形態音韻論——試論」『日本文学研究』 29, 1-12, 梅光女学院大学日本文学会
- 上村幸雄 (1963) 「解説篇」国立国語研究所編『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応」『国語学』 70, 46-66.
- 生塩陸子 (1982) 「単純過去と確言過去」仲宗根政善先生古稀記念編『琉球の言語と文化』論集刊行委員会
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美 (2007) 「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』 47, 151-183.
- 鈴木重幸 (1960) 「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』 41, 74-85.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仲間恵子 (2000) 「沖縄本島北部金武方言——その位置づけ」『琉球アジア社会文化研究』 3, 72-102.
- 西岡敏 (2003) 「沖縄語首里方言の敬語付き動詞」『琉球の方言』 27, 97-137.
- 服部四郎 (1955) 「琉球語 (V. 文法)」市河三喜・服部四郎編『世界言語概説 下巻』研究社
- 松森晶子 (2009) 「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列——「琉球調査用系列別語彙」の開発に向けて」『日本女子大学紀要・文学部』 58, 97-122.

- 宮良信詳 (2000) 『うちなーぐち講座——首里ことばのしくみ』 沖縄タイムス社
- 宮良信詳 (2002) 「沖縄中南部方言動詞のモダリティ」『言語研究』 122, 79-113.
- 琉大方言研究クラブ (1970) 「「沖縄本島南部北部方言の境界」を見つけるために——主として音韻と語彙の面から」『琉球方言』 11, 3-53.
- ローレンス ウェイン (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』 40, 101-118.
- Arakaki, Tomoko (2010) Evidentials in the Shuri Dialect of Luchuan (Ryukyuan). Ph.D Thesis, The University of Edinburgh.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*, John Benjamins.
- de Chene, Brent (2019) r-Epenthesis and Ryukyuan. *Gengo Kenkyu* 155, 101-130.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the Pieces of Inflection. In Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20: Essays in Linguistics in honour of Sylvain Bromberger*, 111-176, MIT Press.
- Harley, Heidi (2008) On the Causative Construction. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, 20-53, Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the Typology of Inchoative/Causative Verb Alternations. In Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87-120, John Benjamins.
- Haspelmath, Martin (1995) The Converb as a Cross-Linguistically Valid Category, In Martin Haspelmath and Ekkehard König (eds.) *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*, 1-55, Mouton de Gruyter.
- Marantz, Alec (1997) No Escape from Syntax: Don't Try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon. *UPenn Working Papers in Linguistics* 4.2, 201-225.
- Yoshimoto, Yasushi (2016) Stem Allomorphy in Okinawan: Sometimes Conditioned by Adjacency, Sometimes Not. *Proceedings of FAJL 8*(MIT Working Papers in Linguistics 79), 233-244.